

淡路島 伊弉諾神宮で開催された 第四回神楽祭 2011. 9. 23.

淡路 国生み神話・高千穂 天孫降臨・天岩戸の日向神話・出雲 大蛇退治・国譲りの出雲神話
 「三大神話・神々のふるさと」淡路島・高千穂・出雲の神楽舞の競演



鎮魂から創生へ
 国生み神楽の初舞台。
 古事記編纂 1300年 第四回 神々のふるさと
 三大神話
 神楽祭
 伊弉諾神宮
 出雲 大蛇退治
 高千穂 天孫降臨

第四回 神楽祭

古事記や日本書紀などの古記録にある「神代」の伝承を「神話」と呼ぶようになったのは、明治時代以後のことです。全国各地には神代から伝わっている古伝承や逸話がたくさんありますが、淡路島を舞台とする「国生み神話」、高千穂への天孫降臨を伝える「日向神話」、素戔嗚尊の八岐大蛇退治などの「出雲神話」はその中核にあたる三大神話といえます。

国生み伝承の淡路島が誇る最古の神社「伊弉諾神宮」に、高千穂神社と出雲大社から神楽を招いて競演奉納する「神々のふるさと」三大神話「神楽祭」も第四回目を迎えることができました。

「三大神話神々のふるさと」
 国生み神話の淡路島
 天孫降臨を伝える高千穂
 大蛇退治・国譲り伝承の出雲
 この「神々のふるさと」をそれぞれしっかりと守ってきた三つの古社があり、それぞれの神話をもとに里人たちが舞い、神々に奉納される神楽が脈々と受け継がれてきた。

- 淡路 巫女神楽と 国生み神楽の創生
- 高千穂神楽
- 出雲 大土地神楽

淡路・出雲・高千穂
 三大神話の郷に伝わる
 神楽の競演
 淡路 伊弉諾神宮 神楽祭



淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭 2011.9.23.

1. 淡路神楽 解説



伊弉諾神宮

「伊弉諾（イザナギ）大神、伊弉冉（イザナミ）大神が日本列島の最初に生んだのが淡路島」という国生み神話で知られている最古の神社。淡路國一宮、延喜式名神大社、旧官幣大社。

古事記、日本書紀には、国生みに始まるすべての神功を果たされた伊弉諾大神が、御子神なる天照大御神に国家の統治の大業を委譲され、最初にお生みになられた淡路島の多賀の地に「幽宮」を構えて余生を過ごされたと記されています。その御住居跡に御陵（みささぎ）が営まれ、至貴の聖地として最古の神社が創始されたのが、当神宮の起源です。

地元では「いっくさん」と別称され日少宮・淡路島神・多賀明神・津名明神と崇められています。 淡路市ホームページより抜粋



淡路神楽

国生みの地に伝わる「淡路神楽」。

国生み神話の郷 淡路島では島内の神社の祭礼には、小学生の女の子たちが巫女として「神楽」を舞います。

伊弉諾神宮には 現在九曲が伝えられている。 太鼓・締太鼓に龍笛が曲を奏し、巫女が二人ないしは四人で舞う。

現在は「扇鈴の舞」や「御幣の舞」が主で、伊弉諾尊が沼矛で海をかき混ぜて国生みをした神話を基にした「鉾の舞」などが伝承されている。舞台を「田」の字を描くように歩を進め、同じ所作を繰り返す、非常にシンプルなもの。

古い神楽の素朴な形式を残しているとも言われている。

また、今回の伊弉諾神宮神楽祭にむけ、創生「国生み神楽」が新たに創生され、この神楽祭で 伊弉諾神宮に奉納された。

淡路神楽 鉾の舞

いざなぎ神宮の特別の祭礼の時にのみ舞われる舞。四人の本職の巫女がそれぞれ鉾を手にして舞う。

イザナギ・イザナミの国生み神話を伝承する場面、鉾で泥海をかき回す所作がみられる。



2. 出雲神楽・大土地神楽 概要



出雲神楽とは民間に伝承される神楽の分類名称。前段の採物舞(とりものまい)と後段の神能(しんのう)の二部分より成る神楽の総称。全国的に広く分布するが、出雲地方に典型がみられるのでこの称がある

大土地(おおどち)神楽は、出雲大社のお膝元・大社町に伝承されている神楽。現在では同保存会神楽方によって10月下旬の大土地荒神社例大祭時を中心に、出雲大社や近郷諸社の祭礼において神楽奉納が行われています。

その構成は、基本的には出雲神楽の形式に則り、「七座(しちざ)」と総称される七番の神事的な舞から始まります。そして後段では神が降臨したとして、「荒神(こうじん・国譲り)」や「野見宿禰(のみのすくね)」などの神話劇“神能”が演じられます。(神能 大土地神楽12座ともいわれる)



島根映像ライブラリー「島根の文化・神楽」より (このサイトに説明動画があります)

<http://movie.pref.shimane.jp/culture/kagura.html>

八千矛

この神楽は、大国主大神が、出雲の国を平和にするため活躍された若いころの物語で、その時の名前を八千矛神と言います。まだ、出雲の国が平和でなく、戦争を繰り返していること、悪事を働いていたのが、八千矛神の兄神である八十神とその子分達(子鬼)でした。そこで、この兄神達をこらしめ、人々が安心して暮らせるようにと、八千矛神は弓矢や刀を持って戦われ、ついに八十神は降参して、出雲の国が平和になるまでを描いたものです。



八千矛神の一人舞



八十神(小鬼)の一人舞)



八千矛神 VS 小鬼 1)



八千矛神 VS 小鬼 2)



八千矛神 VS 八十神 1)



八千矛神 VS 八十神 2)

インターネット 荒神神楽研究部 淡路島第4回神楽祭 大土地神楽「八千矛」取材記事より 2011.9.23.

<http://blog.zige.jp/orothi/date/2011-09-25.html>

3. 高千穂神楽 概説



◆ 高千穂神社

日本の創世記の様子を物語った。日本神話は「古事記」(712年)、「日本書紀」(720年)、各地の「風土記」などにまとめられています。高千穂町は「日本神話」その伝承地として知られ、天孫降臨の伝承地を古くから守ってきた高千穂神社で、平安時代以来1200年以上の歴史を持つ古社です。この地に数多くある神社の中でも格の高い88の神社を「高千穂八十八社」と言い、その「高千穂八十八社」の総社として信仰を集めてきたのが高千穂神社である。



◆ 高千穂の夜神楽

日本神話(日向神話)伝承の地、高千穂には「天照大神が天岩戸にお隠れになったおり、岩戸の前で、あめのうずめの命が舞ったのが始まり」と伝えられる33番で構成された神楽舞が古くから伝承され、「高千穂の夜神楽」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。古くからこの地方の秋の実りへの感謝と翌年の豊穡を祈願し、11月の末から2月上旬にかけて三十三番の夜神楽があちこちの神楽宿で奉納されます。

高千穂神社では 街を訪れる観光客などのため、毎夜 通常 33 番ある高千穂の夜神楽の中から、代表的な天岩戸開きまつわる 手力雄(タチカラオ)の舞、鈿女(ウズメ)の舞、戸取(とどり)の舞の3番とイザナギノミコトとイザナミノミコトが酒作りをユーモラスに演じる御神躰の舞、以上4番にまとめたコンパクトな観光夜神楽が公演されている

高千穂の夜神楽詳細はインターネット <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm>

宮崎観光写真「国指定 高千穂神楽(高千穂の夜神楽) Takachiho no Yokagura」
をござらんください。

今回の淡路伊弉諾神宮での神楽祭りでも そんな中から

「手力雄(たちからお)の舞」「鈿女の舞」「戸取(ととり)の舞」「御神躰(ごしんたい)の舞」の4番の舞が奉納されました。

◆ 今回舞われた高千穂夜神楽 4番の概説

インターネット <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm> より



「手力雄の舞」



「鈿女の舞」



「戸取の舞」



「御神躰の舞」

インターネット <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm> より

◎ 手力雄(たちからお)の舞

手力雄の舞は、手力雄命が天照大神が隠れている天岩戸を探し当てるところをあらわした舞。

鈴と紅白の岩戸幣を持ったこの舞は、静と動の折り合いが見事に調和した神楽舞いです。

手力雄命が持つ岩戸幣には冠がついています。

青幣の山冠は天と水とを、赤幣の横冠は地と土を表し、分け幣の手では青幣を立て赤幣を肩に当て或いは鈴と一緒に横に

して舞われる。ここでは青幣が山、赤幣は畑の象徴と説明される。

しかし、ここでは鎮魂と復活という日神信仰を基調とする岩戸五番のなかの一つとして舞われることから「鈿女(うずめ)」のタマフリに対して幣を用いての天地の祓い神楽として解するのがよりふさわしいように思える。

「柴引」「戸取」「舞い開き」を普通岩戸三番と称し、これに「伊勢」と「鈿女(うずめ)」を加えて岩戸五番という。

「手力雄の舞」は本来伊勢神楽と同一の舞であり、三十三番の数に合わせて後に創案されたものである。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面である。

◎ 鈿女(うずめ)の舞

天鈿女命(あめのうずめのみこと)は 天の岩戸の所在がはっきりしたので、岩戸も前で面白おかしく舞い、天照大神を岩戸より誘い出そうとす舞う。この天鈿女命の、天岩戸の前での舞いが、神楽の起源ともいわれます。

微笑みをたたえた女面に三段切りの御幣と日の丸の扇子(おうぎ)を持ち、素襖(すおう)の袖を巻き上げて優雅に舞われるこの舞は男神の力強さを象徴した手力雄命の戸取りとは対象をなす神楽である。

◎ 戸取(ととり)の舞

戸取明神(手力雄命) 天岩戸を開き、天照大神に再び出て頂く。これで又世の中に光が戻る事となる。

赤面に裁着袴、たすきを腰にはさみ杖を持った力強い手力雄の舞い。

「ああら来たり大神殿、なんとて出でさせ給わぬものならば、われ八百万神の神の力を出し一方の戸を取りて投げ捨つれば、伊勢の国は山田ヶ原に着きにけり。また一方の戸を投げ捨つれば、日向国橘の小戸の阿波木原にぞ着きにけり。その時日月さやかに拝まれ給うものなりやあー」と・・唱教しながら赤面の汗をはらい黒髪をふり乱し、渾身の力をこめて戸をはらう手力雄の舞は「鈿女(うずめ)」の女性らしい優雅な舞とは対照的な荒々しい力に満ちた男性的な神楽です。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面。

これは戸取りという神楽の性格上、渾身の力をこめられるため面(おもて)が紅潮した状態を表しているそうです。

◎ 御神躰(ごしんたい)の舞

伊邪那岐命(イザナギノミコト)と伊邪那美命(イザナミノミコト)二神による国産みの舞といわれるが、本来は新穀感謝祭(新嘗祭・にいなめさい)を祝うために男女の神が新穀で酒をつくり、神前に捧げるお神楽で「酒おこしの舞」ともいわれる。神道祭祀では、新穀、神酒を神前に供えて同じものを直会(なおらい)として人々が一緒に戴き、その行為を通して“神人一体”化すると信じられており、それが神楽御神躰のもつ本来の意味であり、男女二神の抱擁として表現されているものである。

男神は裁着袴に面をつけ餅を入れた藁苞(わらづと)を棒にさして担ぎ、右手の扇で棒をリズムカルにたたきながら出て来る。男神が神庭を一回りすると頬がふくれておちょぼ口の愛敬のある女神が桶とザルをかついで男神に続く。

二人そろって濁酒をこすことになるが、浮気心を出した男神は神楽見物の若い女性のところへ飛び込んで行き大騒ぎとなる。女神につれ戻され再び酒をこす作業がはじまる。

太鼓の調子に合わせてドブロクをしぼり酒を飲み合ううちに酔った二人は抱き合って夫婦となる。



「手力雄の舞」



「鈿女の舞」



「戸取の舞」



「御神躰の舞」